『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第１１回】

やっと手に入れた夜勤料の千円。黄色いカーディガンと吉岡の靴下を買うための千円。しかしミツは、「それを田口さんの奥さんと子どもたちのためにつかってくれ」と頼む〈くたびれた顔〉の声を聴きます。自分のためにひとが気の毒な思いをすることや、不幸になるのを見ると悲しい気持ちになるミツはどんな行動をとったのでしょう。

『手の首のアザ　（一）』（p.89～93）

『人生に必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。そして私の十字架はそのためにある』という〈声〉の意味はミツにはわかりません。でも、田口さんの子どもの口もとに赤くはれていたデキモノが、**『彼女の胸をしめつけて』**きます。**『誰かが不倖せなのは悲しい。地上の誰かが辛がっているのは悲しい。』**…。ミツは引きかえします。**『おばさアーん。』**　**『おばさん、これね、貸すよ。』**―。

ミツは夜勤をしてまでかせいだお金、ミツの毎日を支えてきたカーディガンと吉岡の靴下を買うための千円を、田口さんの家族に差し出したのです ……。

ひとは、ほかの人にとってはどんなに小さな〈夢〉あるいは〈希望〉であっても、自分が「これこそオレの目指すものだ」「これがわたしの求めていたこと」と思ったら、寝食を忘れて取り組んだり、その実現のためにひたすら努力を積み重ねることができるものです。さらに、自分のためだけではなく〈愛するひとのために…〉という〈こころの支え〉が加われば、もう「向かうところ、敵なし！」です。そうした経験は自分を成長させるとともに、他者の存在のかけがえのなさを知る第一歩となるはずです。

それまでのミツは、「女優の着ているようなカーディガンを着て、吉岡さんに会いたい」「彼に靴下をプレゼントしたい」… ということが毎日の生きがいになっていました。その夢が、その希望がやっと実現する寸前まできていたのです。千円を手にしたミツは、どんなにうれしかったことでしょう。どんなに待ちこがれた日だったでしょう …。でもミツは、田口さんの奥さんにそのお金を渡したのです。なぜでしょう？

『新約聖書』には、イエスが語った《たとえ話》がたくさんあります。ここでそのうちのひとつをご紹介します。**『ルカによる福音書』**第10章29～37節を読んでみましょう。少し長くなりますが、ゆっくりお読みください。（読みやすいように、また後述の解説のために原典にはない①～④の段落を設けました。）

◇善きサマリア人のたとえ　（その１）

（ある律法学者が）①「…、**わたしの隣人とはだれですか**」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

②ある**祭司**がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、**レビ人**もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こ

う側を通って行った。

③ところが、旅をしていたある<u>サマリア人</u>は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨２枚を取り出して、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

④さて、あなたはこの３人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」　律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」　そこで、イエスは言われた。「行ってあなたも同じようにしなさい。」

イエスのたとえ話の中でも、よく引用されるものです。この話はとても奥が深いので、解説がいくつか必要です。

①で〈エルサレム〉と〈エリコ〉という町が出てきます。エルサレムには神殿があり、ユダヤの都です。山岳地にあり、標高 750ｍの町です。一方、エリコは地中海の海面より 228ｍ低い死海のほとりの町です。２つの町の標高差は 1,000ｍほどもあります。行き来するのに約４時間かかり、人家のない荒れた岩ばかりの曲がりくねった道が続きます。このような街道でしたので、「追いはぎの名所」だったのです。（もし『聖書』をお持ちでしたら、いちばん後ろの数ページに地図がいくつかありますので、位置を確認していただければと思います。）

この道をある人が旅をしていて追いはぎにあい、半殺しの目にあいました。そこにまず**〈祭司〉**が通りかかります。祭司とは神殿において生贄（いけにえ）を捧げ、式典をおこなう人です。ユダヤ社会において、宗教的・社会的に重要な役割を担った神聖な人物ということになります。その司祭が倒れている人（ユダヤ人）を見ると**『道の向こう側を通って行った』**のです。見ただけで、何もせずに。

次に**〈レビ人〉**がやってきます。レビ人は神殿におけるいろいろな仕事を任されているエリートです。彼もまた**『その人を見ると、道の向こう側を通って行った』**のです。つまり、二人とも〈神に仕える重要な役割〉を持ち、人びとを教え導く立場にある人たちです。その二人が苦しむ旅人、それも自分たちと同じユダヤ人を見捨てて、**『向こう側を通って』**逃げるように立ち去ったのです。日頃、神のことばを人びとに教え、律法を守れと口うるさく言っている彼らが、なぜそのような行動をとったのでしょう。

「追いはぎ（強盗）がまだ近くにいるかもしれない。巻き添えになったらたまらん」、「けがれた人間に近づくと、自分もけがれてしまう（この時代のユダヤ社会では、亡くなった人に触るとけがれると考えられていました）」、「オレにはもっと大事な仕事がある。こんなところでグズグズしておられん」。問われれば、いろいろな理由をつけたにちがいありません。

もし、ほかのだれかがその場にいたら、彼らはどうしたでしょう。おそらく通り過ぎはしなかったでしょう。この旅人をあわれに思い、救いの手を差しのべている自分の姿を誇示したに違いありません。彼らは、神に仕える者として尊敬されていたエリートなのですから、いいところを見せなくてはなりません。おっと、紙数が尽きました。次回まで。

【引用または参考にした書籍】

・遠藤周作　**『わたしが・棄てた・女』**　・日本聖書協会 **『聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき　引照つき』**　・船本弘毅　**『イエスの譬話』**（河出書房新社、2002）